美濃飛騨方言の境界

Isoglosses and dialect boundary between Mino and Hida, Gifu Prefecture

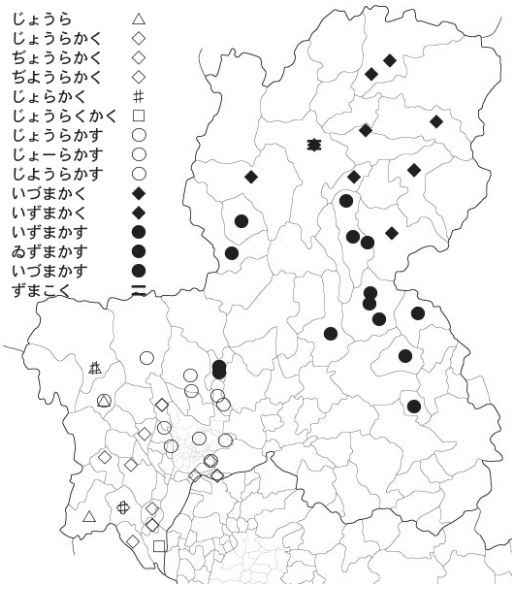
山　田　敏　弘
YAMADA Toshihiro
lingua@gifu-u.ac.jp

１．はじめに

岐阜県を構成する美濃地方と飛騨地方の方言は、どのくらい似ていて、どのくらい異なっているのか。その差は、隣県との差と比較して、大きいのか小さいのか。よく問いかけられるこの問いに答えることは、たやすいことではない。

かつて、奥村三雄は、「その隣接地域、特に信州・北陸・近江との言語差が著しいのに対し、県内の方言対立が余り著しくない。美濃と飛騨との間に一線を画するという様なことは難かしいのである」(奥村編 1976:7)と述べた。たしかに、岐阜県全体の統一感は、他県と相対的なものではあるが、存在する。しかし、岐阜県全体の方言を見渡した際、特に飛騨方言をまっさきに分離して述べなければならないことも、また、否定できない。

では、どこからどの程度、ことばが異なるのか。右図１に示すように、美濃と飛騨でことばの違いは存在する（山田 2017c より）。しかし、それは、この「あぐらをかく」という一語についての分布を示しただけであり、美濃方言と飛騨方言の総体を示してはいない。語彙なら語彙、すべてを見渡して、境界線を引き吟味しなければならないが、管見の限り、どれだけの語彙が飛騨地方に特有な語彙であり、どれだけの語彙が美濃地方だけで使用される語彙なのか、具体的に分布まで見ておこなわれる考察はというと、見られない。



地図1　あぐら(をかく)

もちろん、言語を捉える観点は多様であり、音韻・音声と語彙・文法形式は、岐阜県方言を、それぞれに東西いずれかに特徴付ける。それらのどちらが大きいとも言いがたいが、語彙の特徴が「方言」の大きな特徴であることは言を俟たない。

本考察では、前稿山田(2017a)において瞥見した岐阜県と愛知県との方言の連続性に続き、岐阜県内の旧２国である美濃と飛騨の連続性と境目を、すでに山田(2017c)として報告した 800 枚の地図から、特に語彙に関する 700 枚を中心に、等語線を引くことで考察していく。なお、等語線の引き方は、河川や山地など自然障壁によって隔たれることが多い自治体区画に沿って描くことを原則とし、かけ離れた地点に認められる場合には、孤例として等語線に関わらせないこととする。

２　飛騨地方に特有の語彙

飛騨地方は、飛騨国として一国をなし、また、江戸時代には、天領として、尾張藩はじめ諸藩が群雄割拠した美濃地方とは一線を画した。明治時代になっても、廃藩置県後、わずかな間ではあったが、

現在の長野県松本市に県庁を置く筑摩県の一部となったこともあり、岐阜県になっても独自の文化を育んでいる。飛騨は、古来三郡に分かれ、北から吉城郡(古くは荒城郡)、大野郡、益田郡があったが、平成の大合併により、旧吉城郡の神岡町、宮川村、河合村、古川町が飛騨市になり、同郡国府町と上宝村が、白川村を除く他の大野郡町村とともに高山市に編入される。旧益田郡域は、全域が下呂市となるが、今回、旧益田郡萩原町山之口地区は、1956 年まで旧大野郡であったことより、今回、『山之口村誌』(1962)のデータは、旧大野郡のものとして考察した。

以下、まず、飛騨方言が、岐阜県方言の中でどのような存在であるのかを、具体的な等語線を描くことで、北から順に考察する。なお、以下に挙げる語彙の分布は、いずれも分布する語の南端を示したものである。また、「飛驒市」は正式には「驒」を用いるが、本考察では煩を避け「騨」で統一する。

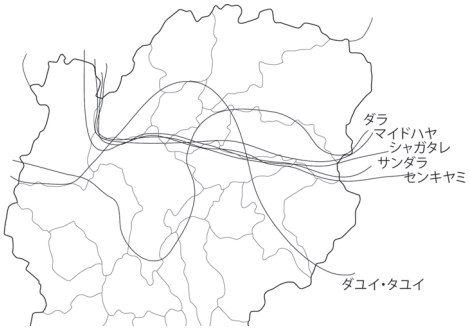
地図2　平成台合併前の岐阜県行政区画

２.１　飛騨北部にのみ分布する語彙

飛騨北部は、越中富山と古来つながっている。富山から入ってきた鰤を、さらに信州松本に届ける中継地点として飛騨高山があり、「飛騨ブリ」として長野県で呼ばれるなどは、飛騨のみならず県内広くよく知られた話である。

飛騨北部、旧吉城郡（現在の飛騨市および高山市の一部）に見られる北陸系のことばには、次のようなものがある。なお、旧吉城郡外での記述を一部含むものも対象とした。

- マイドハヤ（いつもどうも）
- ダユイ／タユイ（疲れた）
- ダラ（馬鹿）
- サンダラ（桟俵）
- シャタガレ（元気のない人）
- センキヤミ（お節介）



地図3　等語線1：北飛騨特有の語彙

「ダユイ」は、富山で「ダヤイ」が一般的であるが、「マイドハヤ」も「ダラ」も、富山を代表する方言として知られることばである。これらは、同時に北飛騨の方言でもある。

「ダラ」などは、旧大野郡清見村においても記述が見られ、やや南に膨らんだ等語線となっている。ただし、清見の中心地は北部の高山市に近接する位置にあり、図ほど湾曲するわけではない。また、「ダユイ・タユイ」に関しては、おそらくその語源である「弛し」に近い「タユイ」が旧大野郡高根に見られることから、長野県境で南下しているように見えるが、やはり、それはより古い形であることが関係しているであろう。

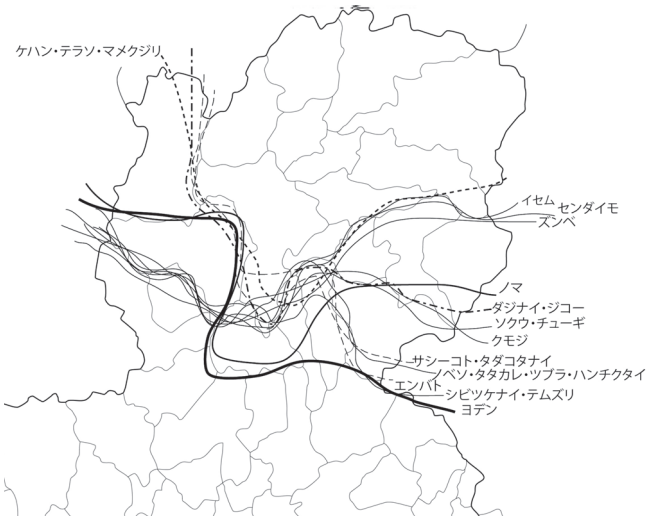
全体として見れば、今回、地図として描けた、すなわち、数地点以上で記述が見られた俚言 700 形式のうち、このように飛騨北部に限定された形式は、わずかに 6 形式であり、このような分布は珍し

いということが理解される。しかしながら、その多くは、白川村と河合村の間から旧吉城郡と大野郡の境界を通っており、旧郡域が方言境界と一致する。一方、長野県境については、旧大野郡丹生川村における記述が見られることから、旧郡境界よりも南に等語線が惹かれる。この点については、飛騨全域への影響と合わせて後述する。

２.２　南飛騨を除く地域に分布する語彙

吉城・大野、この飛騨北部旧二郡に記述が見られる形式には、やや少ないが、次のようなものがある。なお、美濃地方での記述も一地点のみであれば、ここに該当するものとして含めてある。

・イセム（ねたむ）
・エンバト（あいにく）
・クモジ（菜漬け）
・サシーコト／サシーコトメ（長いこと）
・ジコー（香茸）
・シビツケナイ（だらしない）
・ズンベ／ズンベンドー（藁靴）
・センダイモ（じゃがいも）
・ノベソ（麻糸）
・ソクウ（繕う）
・ダジナイ（大丈夫だ）
・タタカレ（山草の肥料）
・タダコタナイ（ただごとでない）
・チューギ／チョーギ（糞へら）
・ツブラ（ゆりかご）
・テムズリ（おもちゃ）
・テラソ／テラス（きつつき）
・キハン／ケハン（脚絆）
・マメクジラ／マメクジリ（なめくじ）
・ノマ（雪崩）
・ハンチクタイ（じれったい、はがゆい）
・ヨデン（余分）



地図4　等語線2：南飛騨を除く地域に分布する語彙

おおよそ旧吉城郡と旧大野郡とに分布する語彙の分布は、３つのパターンに分かれる。もっとも北にある分布は、白川村と旧吉城郡との間を南下し、旧高山市に沿って東進し丹生川の南端を長野県に抜ける点線タイプである。次に、同じく白川村と旧吉城郡との間を南下し、大野郡の南端を下がり来る、破線で示したパターンである。最後は、実線で示した大野郡南西に位置する荘川村の南端から入るパターンであるが、旧高山市の南端に沿って丹生川町南端を抜けるパターンが優勢である一方、一部はより南下する。太線で示した「ヨデン」は、旧郡上郡明宝村から旧益田郡へも広がるが、特異なパターンである。

問題は、なぜこのような等語線の束が観察されるかである。旧郡域は、自然障壁によって隔てられることが多い。白川村の東には、天生（あもう）峠があり国道も通っているが、11 月から 5 月までの冬期半年間は閉ざされる。旧大野郡と旧郡上郡との境は、広大な未開拓高原が人を阻んできたし、清見南部には、坂本峠がある。一方、旧郡域がことばの分布と一致しないことにも、特に疑問はない。郡境界が自然障壁となっている場合もあるが、そうでない場合もあるからである。旧大野郡と旧吉城郡の間は、宮川沿いに開けた越中街道が、往来に賑わいをもたらしてきた。このような地域に言語境界は生じにくい。本節で見た等語線は、飛騨の自然障壁となる地形に沿ったものである。

２.３　飛騨全般に分布する語彙

飛騨旧三郡全域にわたって記述が見られる形式には、次のようなものがある。なお、美濃地方での記述も一地点のみであれば、ここに該当するものとして含めてある。

・アカベラ／アカベロ（いもり）
・アヘンド／アイヘンド（返事）
・アネル（こねる）
・イズマカク（あぐらをかく）
・オゾクタイ（悪い）
・ドーサイ（ひきがえる）
・シンバレ（しもやけ）
・セーツク（催促する）
・ドージ／ドジ／ロージ（入口の土間）
・バンガタシ（夕方）
・ヒコネ（うたたね）
・マチョーナ（まともな）
・マタジ（始末）
・ムテンクテン（非常に）

地図5　等語線3：飛騨全般に分布する語彙

興味深いのは、このように飛騨の旧国域に一致する語が、前節と後節に見る語ほど多くないということである。また、確かに旧益田郡金山町と旧郡上郡和良村との間には、等語線が多く引かれるが、細めの実線で示した飛騨全域を含んで分布する語は実際少なく、逆に旧益田郡の中で等語線が多く見られる。このことは、飛騨が天領であった時代においても、宮峠は、郡上から白川に至る道における蛭ヶ野高原のように、ことばの流通、すなわち人の往来を阻害する、ひとつの大きな障壁であったことを想像させる。一方で、国という単位が、自然障壁ほどに交流を大きく妨げてはいなかったのではないだろうか。坂本峠を越えて旧明宝村に抜ける道は、比較的通りやすく多くの語をつないでいる。

一点気になるのが、類似語形の連続性である。「オゾクタイ」や「セーツク」は、美濃地方で「オゾイ」や「セツク／セッツク」が用いられるなど、類似した形式が美濃地方に見られる。かといって、この２語を以て、旧国という制度がことばを変異させるなどと考えるわけではない。ただ、「オゾイ」がなければ「オゾクタイ」はなく、言語の経済性から「セーツク」は「セツク」より古い形であるとすると、前者は飛騨独自で発達した形であり、後者は飛騨で古形を残した事例と捉えるのが自然である。語それぞれの成立事情があり、それぞれの伝播がある。

２.４　飛騨と郡上に分布する語彙

前節で、飛騨国南部である旧益田郡が、旧郡上郡と同じ方言分布を呈する可能性を示唆した。旧飛騨国として切り取られる領域よりも、旧益田・旧郡上両郡南端における境界のほうが、等語線の束がやや太い。これは、次の語彙の境界を描くことで示される。

・アクレル（ふざけ騒ぐ）
・アゼチ／アジチ（分家）
・イセキナイ（せっかちな）
・イトシー（かわいそう）
・ウタテー／オタテー（ありがたい）

地図6　等語線4：飛騨と郡上に分布する語彙

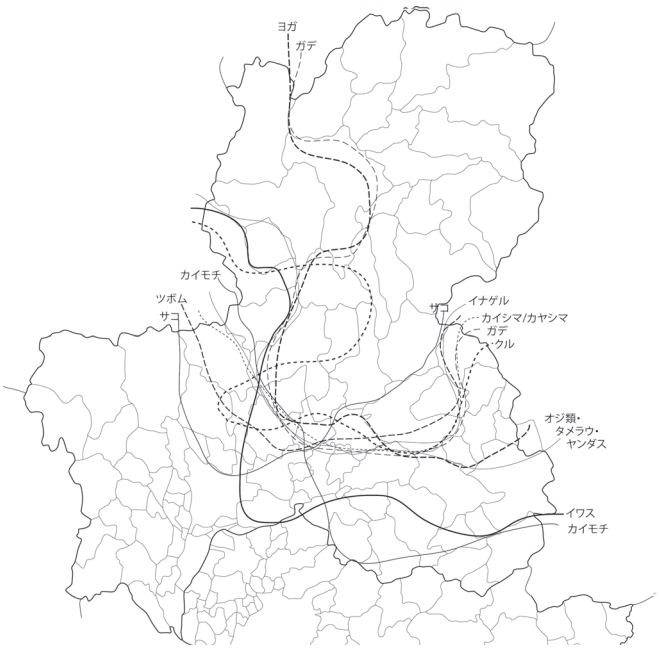
・キッパ（区切り、一段落）
・クツバシー（くすぐったい）
・ゲバス／ゲバイタ（失敗する・失敗した）
・シンビキ（躊躇い）
・スケノカワ（自業自得）
・ソデ（外）
・ツルム／ツルボル（交尾する）
・ハルキ／ハリキ（薪）
・クム/クマス（露出する、はみでる）
・コマジキ（間食）
・スガキ（上簇）
・スロ（大根の空洞）
・ツラハラシ（無愛想もの、ふくれっつら）
・ナギ（焼き畑）
・ユーツギ（回覧板、言い継ぎ）

２.３で挙げた「イズマカク」は、郡上市と下呂市においては、ほぼ「イズマカス」となる（図１参照）。これも、飛騨と郡上に分布する形式と考えてよいであろう。また、「ゲバイタ」は、大野郡以北にのみ分布する。「チョーナ（手斧）」や「ユキオコシ（雪の頃の地鳴り）」も、郡上市白鳥と東白川村に記述があり、このパターンに当てはまるが、報告地点が少ないため、十分な地点数に基づいた等語線を描くには至っていない。

では、この等語線パターンは、どのようにして描かれるのであろうか。美濃市から郡上市に入る郡上街道は、たしかに、その境界の須原地区と母野（はんの）地区との間には、長良川が流れトンネルがあり、昔は、やや通りにくさがあったように見られるが、それほど険峻な自然境界があるわけではない。一方で、美濃市北部の須原まで、「アイ」が「エァ」のようになる連母音の融合が見られるが、郡上市に入るとまったくなくなる。これは、江戸時代の尾張藩の影響が明確である。藩境界という、いわば人工障壁があったと考えると無理がない。旧益田郡南部は、飛騨川に沿って下るよりも、古くは山中を行き来していたという証言がある。いずれにしても飛騨国と美濃国という人工障壁もことばを隔てる一要因となってきた。

この人工障壁は、容易に南下を可能とする。飛騨ならびに郡上をさらに南下した等語線が得られるものについては、以下のようなものがある。

・イナゲル（取り除く、選別する）
・タメラウ（気を付ける）
・イワス（岩）
・オジ（次男以下の男子）
・カイモチ（おはぎ）
・カエシマ／カイシマ／カーシマ（裏返し）
・ガデ（量）
・クル（行く）
・サコ／サク（小さい谷）
・ツボム（蚕が眠る）
・ヤンダス（差し出す）
・ヨガ（蚊）



地図7　等語線5：飛騨以南にも分布する語彙

特に、飛騨と東濃は、ことばの共通点が少なくない。しかし、それは、より正確に言えば、加茂郡北部の白川町・東白川村を通っての分布の広がりと考えることが妥当であり、裏木曽街道と呼ばれる下呂から中津川に至る道よりも役立っていると見ることができる。飛騨川沿いに金山町から南下する手段も、大正期に開通した国鉄により便利になったとは言え、山の道が多くの人を運んだという証言を白川町で調査した際に得ている。林業が盛んなことの土地において、山は障壁でなく人を運ぶ道であった。そのことをことばの広がりは示してい

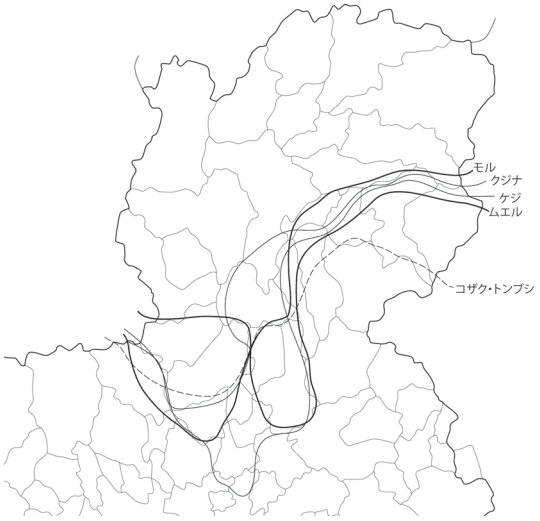
る。ただし、それは、北から南へことばが広がった場合であり、その点は、最後に考察する。

２.５　飛騨と郡上に分布する語彙

一方で、旧益田郡（下呂市）に分布がほとんどなく、美濃北部に分布が見られる語も、少数ではあるが存在する。

・クジナ（たんぽぽ）
・ケジ／ケージ（除草）
・コザク（踏み分ける）
・トンブシ／トンバス（いなご）
・ムエル／ムヤス（増える・増やす）
・モル（桑をもぐ）

「コザク」と「トンブシ」は、旧益田郡を除いた飛騨地域と郡上で用いられるが、その他の４語は、大野郡南部の朝日村ならびに高根村では用いられない。朝日村と高根村は、旧益田郡と山地で隔てられているが、明治時代まで益田郡に属していた。同じく、金山町も明治時代までは、益田郡ではなく美濃国の一部であり、一部尾張藩の治下にあった。古い行政区画が言語境界を画定するのに影響することも十分に考えられるが、それは語による。



地図8　等語線6：飛騨(除　益田)と郡上に分布する語彙

では、逆に、なぜ郡上が飛騨とこれらの語彙を共有するのであろうか。植物に関係する語が多いことは、まったくの偶然であろう。植生とも関係する可能性はないとは言えないが、ここで断ずることはできない。むしろ、都からの伝播を考えれば、県西部に南への広がりを確認できるということは、これらの語が飛騨から南下して広がっていることの証左となる可能性がある。さきほど、安易に「南下」と書いたが、飛騨はことばの発信地になるのか、もう少し吟味したい。

２.６　飛騨・郡上と西濃北部に分布する語彙

飛騨地方は、意外と西濃北部の山沿いの地帯と繋がっている。それは、明治30年まで美濃地方にも旧大野郡があり（現在でも安八郡大野町としてその名を留める）、福井県の大野市を介して、飛騨地方の大野郡へと広がることからも、容易に理解される。

では、ことばの面でも、そのつながりはあるのだろうか。

・イカバル／ウカバル（水が溢れる）
・オカレル／オカル（発情する）
・オネル（背負う）
・ガオロ／ガウロ／カワイロ等(河童)
・カラスガイ（手足の痙攣）
・シンガイ（へそくり）
・ソラ（高いところ）
・タカ（高いところ）
・タビル（箕で煽って選別する）
・チョーダ（主人の寝所）
・ツクバル（正座する）
・テキナイ（苦しい）
・デッチ（男児）

地図9　等語線7：飛騨・郡上・西濃北部に分布する語彙

・バイタ（丸太、太い棒）
・バンドリ（むささび）
・ユイ／ユー（結い）
・ハジクナル／ヘジクナル（うずくまる）
・ミンジャ（洗い場）
・ヨーサノモノ（ネズミの忌み言葉）

あまりに煩雑になるため、一部の等語線を描くに留めるが、ここで指摘したいのは、飛騨は西濃北部と、美濃中央部を介さずつながっている点である。

これらの中で、福井県の『大野市史』に記述が見られるのは、「イカバル」、「シンガイ」、「テキナイ」、「デッチ」、「バイタ」、「バンドリ」、「ユイ」である。19 形式のうちの 7 形式は、半数にも満たない数であるが、これらは広く北陸に分布する。やはり北から岐阜県に入ったと考えるのが妥当であろう。

では、半数以上の上記語彙は、なぜ西濃北部と飛騨に分布するのであろうか。実際、その事情は、語によって異なる。『日本方言辞典』において、「オカレル／オカル」、ガワロ類、「ヨーサノモノ」は、県外に見られない。また、「タカ」は、遠く離れた四国に確認されるのみである。長野と静岡に見られる「タビル」も、新潟と長野に見られる「ハジクナル／ヘジクナル」、さらには、新潟にのみ報告される「ツクバル」とカラスガイ類も、その間に伝播の道があり途切れたのか、それとも飛び地的に広がったのか、その証拠を今、見いだすことはできない。この点も、今後の課題となる。

２.７　その他の分布

以上見てきたように、飛騨地方の分布は、おおよそ北から順に南に広がりを呈しているように捉えられる。このことから、飛騨地方は、北から順にことばが伝播しているようにも捉えられる。

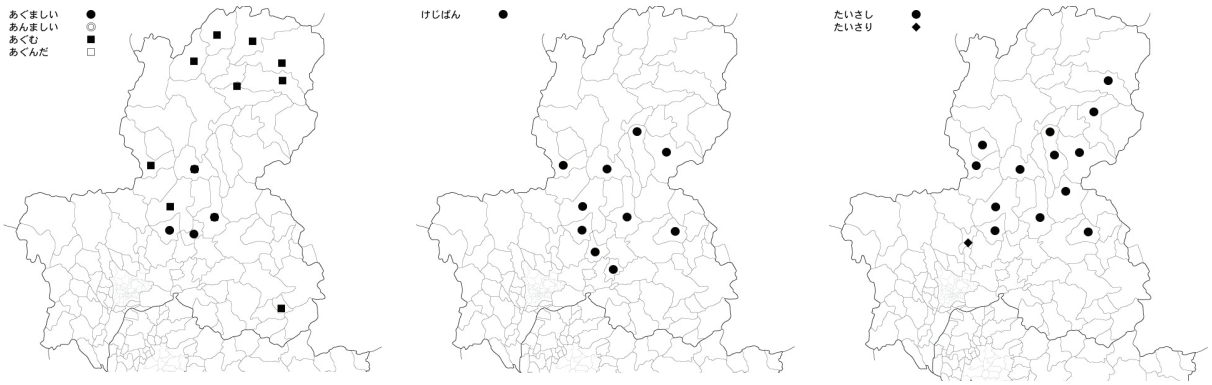
一方で、異なる分布を示すものもある。なかでも、特異な分布を示す形式を挙げておく。

「飽きる」の意味の「アグム」ならびに「面倒な」の意味の「アグマシー」は、飛騨全域と郡上に見られるが、高山市を中心とした旧大野郡に記述が見られない。同じような分布をするのが「豆腐」の意味の「トッペ」である。飛騨北部と旧益田郡下呂町に記述があるが、高山市近辺に記述は見られない。

また、「炊事」を意味する「ケジバン」は、郡上と旧益田郡に見られ、旧武儀郡や加茂郡にも連なった分布が確認されるが、独自の分布を呈する形式として注目に値する。「除草」を意味する「ケジ」は、「ケジバン」より広く飛騨地方北部にまで分布するが基本的に分布域が異なることから、関連性が疑われるが、意味的に異なるため慎重に吟味する必要がある。

さらに、「〜途中」を意味する接尾辞「〜サシ」を含む「炊きさし」に由来することが比較的はっきりしている「タイサシ」も、やや飛騨北部に入り込んでいるが、郡上と旧益田郡に中心的に分布する。

ほかにも、「タバエタ（馬鹿げた）」は、益田郡と恵那北部に、「テグリ／テングリ（片手桶）」は、旧山県郡から旧大野郡まで広く分布が確認できる。



地図 10,11,12　アグマシー、ケジバン、タイサシ

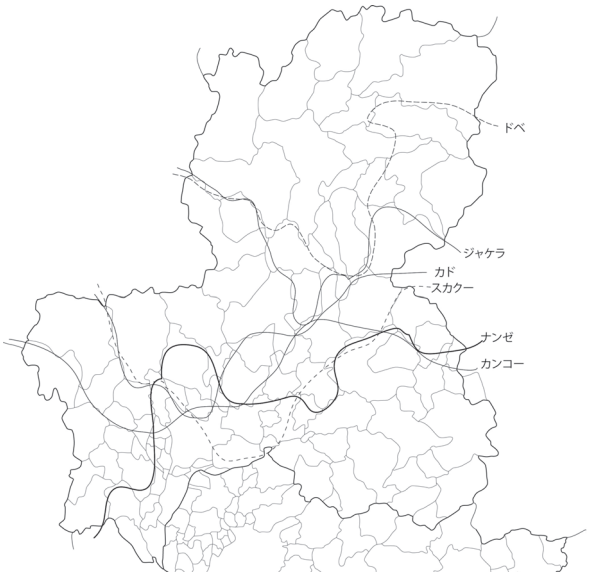
これらの分布を説明するには、どのような方法が最良であろうか。「アグマシー」や「トッペ」は、飛騨全域に存在した中に、高山市から新語形が広がり駆逐していったというストーリーが、普通に考えればまっさきに思い浮かぶ。事実、岩島周一(2001)によれば、「面倒な」の意味では「メンドイ」と「メンドクサイ」が載り、「豆腐」については、高山市周辺にそのような優勢なことばは見られず、共通語が使用されることがほのめかされる。この限りにおいて、高山に受容された新語が、旧大野郡域に広がり分断したというストーリーは、現実的である。ただし、分布からの推論以外、それを裏付ける証拠はない。

一方、岐阜県中部に重点的に分布する「ケジバン」や「タイサシ」などは、旧郡上郡ならびに旧益田郡のみに発達したことも可能性として指摘できる。同じように、郡上市で現在でも特有の方言として報告される「ヘッア」という挨拶ことばは、金山町の「ヘーアン」を介して、愛知県北設楽郡東栄町にも「ヘッアッ」という形に繋がっている。さらには、山梨県の「ハッアイ」なども報告がある。２.４節でも述べたが、山の道は、現代人が考えるよりも繋がっている。しかし、その道は細い。だれがそのことばを伝えるのか。鳥屋人（とやど）と呼ばれる人たちであろうか。それだけで、ことばは社会的価値(プレスティージ)をもって伝わっていくであろうか。ことばの発生・伝播・消失の過程には、まだわからないことがたくさんある。一語一語の詳細をさらに考えていく必要がある。

３．美濃地方に特徴的に分布する語彙

美濃地方に分布し、飛騨地方を不使用域という切り出し方をする分布を見せるものもある。以下に、その一部を挙げる。なお、地図 13 に描いた等語線は、それ以南において用いられることを示す。

・カド（表庭）
・カンコー（工夫する）
・ジャケラ（冗談）
・スカクー（だまされる、当てが外れる）
・ドベ（びり）
・ナンゼ（なぜ）



地図 13　等語線8：美濃地方に分布する語彙

ここからわかることは、やはり、郡上街道と飛騨街道、どちらも美濃からことばが伝播する際の通り道となっているということである。それは、特に「ドベ」や「ジャケラ」に見られる。一方、「カンコー」た「ナンゼ」のように、北上が限定されていることばも見られる。それらが、どのような特徴をもっているかは、さらなる検討が必要であるが、飛騨を含む岐阜県北部に、これらのことばの流入を阻む優勢な語が存在するかというとそうではない。

なお、美濃地方における伝播に関しては、前稿山田(2017a)で見た特に一段動詞の否定表現のように、西濃地方からのことばの広がりが、現在でも続いていると考えられる。また、県境を越えて伝播していることも確認されている。

４．飛騨方言の成立理由

飛騨方言は、どのようにして成立したのか。

一般に広く受け入れられている方言周圏論によれば、古語が美濃から飛騨に広がったか、あるいは、北陸経由で飛騨に広がったと考えるしかない。実際にそうであれば、飛騨は、美濃よりも北陸よりも

下流におかれた辺境の地となるしかない。河川の下流からさかのぼるグロットグラムにしても、都に近い下流が先に方言を受容し、上流へと伝えられていくという文脈で語られることが多い。換言すれば、これも、方言周圏論の毛細血管を検証する作業である。その意味では、飛騨は、河川の最上流であり、ことばの最下流とならざるをえない。

しかし、本当にそうであろうか。確かに、富山から流入したと考えられる語彙もある。一方で、今回見たように、飛騨は、けっしてことばのどん詰まりではない。その流入が北陸からであっても、さらなる広がりを南に押し広げていく発信地にもなっているのではないか。２.２節以降で見てきた等語線は、その可能性を示している。さらに、２.７節で見た「ケジバン」や「タイサシ」など、郡上市や下呂市に分布が固まってみられる語などは、この地に発祥し拡大した可能性も示唆する。飛騨も郡上も、ことばのどん詰まりではないのだろう。

では、その拡大の原動力はなんであろうか。「ノマ（雪崩）」や「タイサシ（燃えさし）」など、山のことばの発祥は、飛騨にあってもおかしくない。しかし、それでは、行動や性状を表すことばは説明できない。語ごとに詳細を考察するには、紙幅も尽きた。今後の課題としていきたい。

５．おわりに

等語線を描くことで岐阜県内の方言分布からことばの伝播を考察してきた。等語線を描く研究も、近年はあまり多くない。それでも、個々の地図を重ねるよりも、一枚の地図に多くの語の境界線を示せるメリットは、十分示せたのではないか。ただ、結果としては、各節末に記したように、課題ばかりが残った。それほどに、地域の方言動態は不明なことばかりである。一方で、地域に限定されたことばの分布だからこそ、その地理をよりよく考えることで、その解明の糸口が見つかる期待も残されている。今後の検討が広く望まれる。

さて、最後になるが、およそ 100 年の時差のある市町村史記述を地図化し、そこから等語線を描くことについて検証しておかなければならない。特に、伝播などは、時差の中にある現象であり、その根拠となる分布に時差があっては十分な証拠が得られないとの指摘はあろう。

筆者自身、この方法が優れているとは思っていない。しかし、方言には、大きく短期間で境界が動く形式と、100 年ではほとんど境界が動かない、言葉を換えると、この時代に勢力を拡散しない方言とがあるのは事実である。

前者は、たとえば、東濃地方での一段動詞のラ行五段化であり、『方言文法全国地図』において、岐阜県内で一地点でのみ観察された(72 図,74 図)この現象が、『新日本言語地図』39 図においては、調査地点数が減ったにもかかわらず岐阜県内で 3 箇所になっていることが挙げられる（岐阜県内の調査は、大半が本稿筆者担当）。文法形式のような類推が効く変化は、伝播しやすい。一方で、『新日本言語地図』13 図「サトイモ」の解説に、「共通語と同形の里芋が全国的に分布を拡大させ」たほかは、「大半は、半世紀を経ても大きな変化は見られない」（岸江）とあるように、変化しない形式も多い。今回の資料に関しても、古い資料・新しい資料に関わらず記述が変わらず、100 年で大きく変化していないと考えられる形式も少なくなく、このような 100 年間の市町村史の記述から、言語境界を描いていくことは、詳細な対面調査が可能であればともかく、その補完的位置づけとして、間違った方法であるとは言えないと考える。もちろん、より精緻な分布調査は必要であるが、この方言（俚言）の消失が著しい昨今、それが、本稿で取り上げた市町村史の記述と同程度に可能かどうかは懐疑的である。少なくとも、何もしないで批判する声は、傾聴に値しない。本考察での方言境界の提案に対し、今後、詳細に修正されていくことが望まれる。

その上で、本考察の目的である、美濃と飛騨の間に方言境界は存在するかという問いに答えておかなければならない。700 語の俚言のうちおよそ 100 項目が、北から南までその等語線の位置には差があるが、美濃と飛騨で異なりを呈したということを事実としてあげることができる。日常使用する共

通語も交えた何千という語の中で、たった100語であるとも言えるし、岐阜県北部の方言を特徴付けるには十分な数とも言える。また、汎用性があり印象に残る文末の助動詞・助詞類を今回は取り上げていないため、美濃方言と飛騨方言が異なると断定することなどはできない。本考察では、客観的な証拠を挙げたのみに留まる。

しかし、等語線が束になる場所はいくつか示すことができたであろう。それによれば、南飛騨と呼ばれる下呂市は、飛騨の中でもことばが異なる地域であり、むしろ郡上が飛騨と共通する語を多く用いることも示すことができた。ただし、その境界線とて、他所に引かれたものほど鮮明ではない。やはり岐阜県は、常に漸次的変化が西から東へ、そして南から北へと及んでいく地である。

立ち止まって考える必要もある。本考察では、飛騨に視点を置くことにより、不用意に「北から南へ」とことばの伝播を捉えるきらいもあったが、これにはもちろん検証が必要である。反対に、すべての語が「南から北へ伝播する」と推測することも、実際避けなければならない。

今回の分布で、美濃側に分布していて飛騨に分布が見られない語よりも、飛騨に分布していて美濃に見られない語のほうが多かった。今回は、同じ意味のことばの分布よりも、特定の俚言の勢力範囲を示したためにそうなっただけである。実際、すべての飛騨語彙が、同じ概念を示す場合のより古い形であるわけではない。このことを明解にするためには、今少し時間と紙幅が必要である。この点については、今後、考察していくこととする。

【付記】

本研究は、日本学術振興会科学研究費基盤研究(C)「愛知県・福井県の方言データベース構築および岐阜県方言との関連における総合的研究」（課題番号26370532、代表：山田敏弘）の研究成果の一部である。

【参考文献】

岩島周一（2001）『逆引・飛騨の方言』私家版
大西拓一郎編（2016a）『新日本言語地図–分布図で見渡す方言の世界–』朝倉書店
大西拓一郎（2016b）『ことばの地理学-方言はなぜそこにあるのか-』大修館書店
大野市史編さん委員会（2006）『大野市史　方言編』大野市役所
奥村三雄編（1976）『岐阜県方言の研究』大衆書房
加藤毅編（1994-98）『日本のまん真ん中　岐阜県方言地図』岐阜県方言研究会
国立国語研究所編（1966-74）『日本言語地図』大蔵省印刷局
山田敏弘（2017a）「岐阜県方言と愛知県方言の連続性」『岐阜大学研究報告　人文科学』65巻２号
山田敏弘（2017b）『改訂増補統一版　岐阜県方言辞典』科研費報告書
山田敏弘（2017c）『改訂増補統一版　岐阜県方言辞典～岐阜県・愛知県　方言地図』科研費報告書